

氏名	金 粉 淑
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	文 学
学位授与番号	博甲第2179号
学位授与の日付	平成13年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	『とはずがたり』の研究
論文審査委員	教授 工藤進思郎 教授 渡邊 護 教授 下河部行輝 助教授 田仲 洋己 東北大学大学院文学研究科教授 仁平 道明

### 学位論文内容の要旨

本論文は、日本における中世女流日記文学の代表的作品と目される後深草院二条の『とはずがたり』を取り上げ、その形成事情の考察や、主題・モチーフ・イメージ・人生観照などを含む作品の構造分析を通して、中古女流日記文学との共通性と異質性を示す中世的な自照性の本質を照射することにより、本日記作品の特質を究明するとともに、その文学史的定位を試みたものである。既発表論文4編を取り込みながら、新たに書き起こした章・節を加え、終章を含めて全五章にまとめた。ワープロ打ちでA4判190頁、400字詰に換算して約570枚の論文である。

#### 第一章 『とはずがたり』にみる愛の諸相

「後深草院との関係―「契り」を中心として―」、「「雪の曙」との関係」、「「有明の月」との関係」の三節に分けて論じる。作者二条の生活圏であった御所において、彼女は後深草院の寵愛人でありながら、「宮仕え女房」として自由奔放に生きた。そのような彼女をめぐる繰り広げられる愛の諸相について、その前半生に大きな影響を与えた3人の男性―後深草院・雪の曙（西園寺実兼）・有明の月（性助法親王）―との交渉を中心に検討するとともに、二条の恋愛観・異性観についても考察を加えた。

#### 第二章 『とはずがたり』の心情表現

「「はかなし」から「無情」へ」、「「うし」「つらし」「つれなし」の表現」、「「涙」の表現―「涙のほかは言問ふ方もなくて」の表現を手がかりに―」の三節に分けて論じる。波瀾万丈と言ってよい二条の生き方を通してその人生観・世界観を把握するための手がかりとして、ここでは日記中に多発する心情表現に注目した。「はかなし」の心情から「無常」の意識への変遷・深化について考察するとともに、「うし」「つらし」「つれなし」の三語の現れ方を検証することで二条の考え方・生き方の特質を探り、さらに「涙」の記述に関する考察を通して、その宿命的な前半生が「涙」の表現に濃縮されているとした。

#### 第三章 二条の生にみる喪失と成熟の構図

「執着心を超克する女としての二条」、「旅と自由と信仰の相関性」の二節に分けて論じる。作中に描かれた「夢」の持つ意味を文脈に沿って考察することにより、それらの記述が、あらゆる対象への執着心を断念し、個としての自己の主張と、自己愛としての性の解放の発見と実践を通して、集団としての制度的・秩序的な時空間の制約から解放されて、

個としての反秩序的な時空間への二条の転身を必然たらしめる証言として機能しているとした。また後編（巻四～五）における出家尼僧としての旅は、二条の人生における後深草院の存在の意味を確かめるとともに、頼るべき信仰世界に自らを導く手段でもあったと結論づけた。

#### 第四章 『とはずがたり』における和歌の位相

「歌人としての二条」、「作品における地の文と和歌との相関性」の二節に分けて論じる。作中に挿入された和歌 159 首がどのように分布しているかについて前編（巻一～三）・後編（巻四～五）ごとに考察するとともに、二条自身の歌 105 首を贈答歌・独詠歌に分けて考え、それぞれ和歌がプロットの展開に果たしている役割についての検討を通して、歌人としての二条の素質と特色、及び日記文学の作者としての二条の特異性について指摘した。

#### 終章 日記文学史上における『とはずがたり』の意義

「日記文学の概念」、「中世女流日記文学の展開」、「『蜻蛉日記』から『とはずがたり』への展開」の三項に分けて論じる。「日記文学」の概念ないし定義をめぐる内外の研究者による諸説について検討するとともに、中世女流日記作品及び平安時代の『蜻蛉日記』との比較を通して、『とはずがたり』の位置づけを試みた。すなわち、当時の通常の女の生き方である「家」「妻」「母」という制度的枠組みから逸脱し、非中世的＝反中世的な「個」としての自己に目覚めた二条像が鮮烈に刻印された作品として捉えることで、「宮仕え女房」の手になる女流日記文学の極限に佇立する新しい女の生き方を、未来に差し出しているところに『とはずがたり』のすぐれて文学的な意義が存するとした。

### 論文審査結果の要旨

学位審査会は国文学分野 4 名、国語学分野 1 名の委員で構成し、平成 13 年 2 月 5 日に開催した。本論文を詳細かつ慎重に審査した結果、審査委員が積極的に評価できるとした主要な点は以下のとおりである。

- (1) 全体的に研究テーマの立て方はよく考えられており、また従来の『とはずがたり』研究への目配りも行き届いている。本論文はその上で自己の視点に基づく研究として成った作品論であり、一定の成果をあげたものとして評価ができる。
- (2) 筆者は終章の一「日記文学の概念」においてフィリップ・ルジュンヌの『自伝契約』（1975 年）を取り上げ、その「自伝」の定義及び理論の有効性について検討するとともに、その成果は、第三章第一節「執着心を超克する女としての二条」及び終章の三「『蜻蛉日記』から『とはずがたり』への展開」において如何なく発揮されている。これは従来の『とはずがたり』研究の枠を越えた斬新な論述として注目に値する。
- (3) 日記中の心情表現として「はかなし」をはじめ、「うし」「つらし」「つれなし」などの言葉に注目し、具体的にその用例を示して丹念に検討することによって、これらの心情表現を二条の生き方と関わらせて考察したのは、「涙」の表現に関する精緻な考察とともに、ユニークな研究として評価できる。

一方、審査を通じて指摘された問題点もなかったわけではない。内容に関わる主な点として、

- (1) フィリップ・ルジュンヌの「自伝」説を援用しつつ『とはずがたり』を論じた点は評価できるが、日本における日記文学の研究、わけても『とはずがたり』成立時代の

政治・社会・宗教など、歴史的・文化的背景についての考察がやや疎かになっていることは否めない。

- (2) 二条の生きざまを総括して筆者は「非中世的＝反中世的」という言葉をよく使っているが、そのように規定する内実ないし根拠が必ずしも明確であると言い切れないのも、上記(1)の理由によるところが大きいのではないかと思われる。
- (3) 第四章において日記中の和歌を論じるにあたって、題詠歌が見られないという事実を、二条が「歌壇からは離れた存在」であったことによるとしたのは問題であろう。一首一首の和歌についての読みを深めるとともに、和歌史についての知見を深める必要がある。
- (4) 作者二条を「宮仕え女房」と規定するのは基本的には決して間違いではないが、実際に彼女が周囲の人々からどのように見られていたのかという点に注目するならば、もっと複雑な存在だったはずで、そうした視点からの考察が不十分である。

などの指摘があった。

しかし、これらの点の多くは欠陥というよりも、今後さらに研究を深め発展させる上で期待といった趣旨のものであり、本論文に示された研究成果を大きく損なうものでないことが確認された。

審査委員会は、以上の事柄を総合的に判断し、本論文を博士の学位論文として認定することについて全員一致で合意した。